

Rookies!

対話教育を学びにきた大阪で、震災に関する哲学カフェを企画・進行

辻 明典さん（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）

哲学カフェ「原発について何を知るべきか？」の進行を務めた辻明典さんは、大阪大学の大学院生。もともと教育学を専攻していましたが、「対話を用いた教育」への関心から、2011 年春、対話実践が盛んな臨床哲学研究室へ進学。ところが、その直前、福島県南相馬市にある実家が東日本大震災で被災します。哲学カフェの企画の裏には、どんな思いがあったのでしょうか？

異質な他者と出会える空間

初めて哲学カフェに参加したのは、2010 年の 8 月。東京の神保町の喫茶店でカフェフィロが開催している哲学カフェでした。「対話を通して考えること」を軸とした卒論のヒントが欲しいと思っていたとき、ゼミの先生が紹介してくださいました。参加してみて、みなさん、よくしゃべるので驚きました。話したい内容もその場で参加者たちが話し合いながら決めていくのが興味深く、なにより、楽しかった！



哲学カフェは、異質な他者と出会うことが可能な空間であり、それによって自身の信念の基盤を揺さぶることが出来る場だと思います。

原発に関する哲学カフェ

広くいろんな人と震災について考える機会が欲しいと思っているときに、臨床哲学研究室で知り合ったカフェフィロの方

にお誘いいただきました。私自身も、原子力災害の被災者ですし、現実と距離を置きながら考えるきっかけが欲しかった。参加者のなかには、結論を導こうとはしないスタイルにいらだちを覚えた方もいらっしゃいました。私自身も原子力災害の当事者なので、原発に対して明確な「答え」が欲しいという思いには共感できます。しかし、原発の問題について哲学カフェが有効なのは、知識や情報ではなく、問いそのものを考え直す機会を得られることではないでしょうか。

高校生との対話

研究室の仲間と京都の高校で対話授業を担当しているほか、最近は他の研究科の学生と、高校生とともに被災者支援を考える活動も行っています。これからも、哲学カフェや学校など、対話の場に積極的に足を運びたいと思っています。そのなかで、哲学的に話し、考えることにしてもっと考えていきたいです。

哲学喫茶瓦版

NEWSLETTER FOR PEOPLE LIVING WITH PHILOSOPHY FROM CAFÉ PHILO

2011

9

特集：東日本大震災と哲学カフェ

- review 01 てつがくカフェ@ふくしま「いま、〈ふくしま〉で哲学するとは？」
- review 02 哲学カフェ「原発について何を知るべきか？」@アートエリア B1
- Rookies! 辻明典さん～大阪で原発に関する哲学カフェを企画・進行～

interview

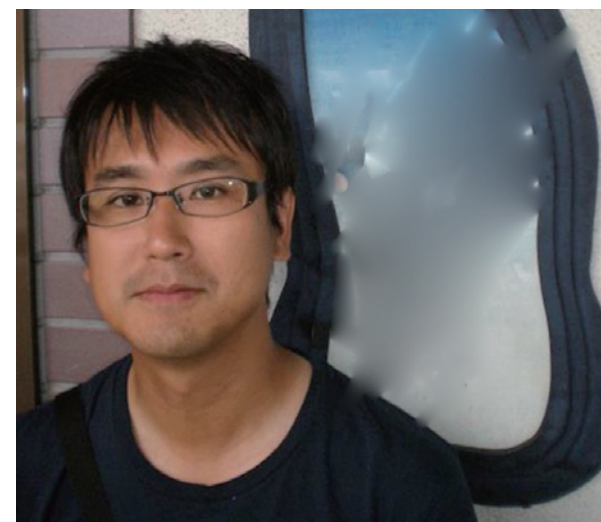
てつがくカフェ@ふくしま～震災後の福島で哲学カフェを開催～



小野原 雅夫
（福島大学教授）

+

渡部 純
（県立福島商業高校教師）



「この〈出来事〉から哲学ができないのであれば、哲学が存在する意味はどこにあるのだろうか？」

渡部：もともと学生時代から現実の社会問題に関心を寄せていた私は、むしろ哲学に対しては“浮世離れした学問”と敬遠さえていました。そんな私の哲学に対するイメージを 180 度転換したのは、「出来事から出発し、出来事をめぐって哲学することをわたしは夢見ている」（高橋哲哉著『記憶のエチカ』）という言葉です。目を背けたくなるような〈出来事〉や〈現実〉から哲学を切り離さない姿勢に共鳴するとともに、そこで意味する哲学の在りように興味を惹かれました。その意味で言うと、未曾有の震災・原発事故という今回の〈出来事〉の意味を考え続けることは、私を哲学に向かわせた原点と切り離せない問題です。

小野原：あれだけ大きな〈出来事〉が発生すると人は誰しも哲学をしてしまうのだと思います。私としては、哲学の真骨頂はもっとごく身近な日常的な事柄を深く問い直すことにあると思っています。〈出来事〉が大きくなってしまうと、発生直後では〈出来事〉の全体像をつかむことができませんし、また、こういう問題の場合、政治やらイデオロギーやら利害関係やらが介入してきてしまつて、純粋に哲学的な議論ができなくなってしまう可能性も高くなります。実際に哲学カフェをやつてみて、まだこのテーマで哲学的な議論をするには時期尚早だったかなという気もしました。しかし、哲学的対話となるかどうかは別

として、このテーマについてみんなで語り合うことは必要だったのだと感じました。
渡部：この〈出来事〉に対して、いまだ私たちは意味や言葉を見つげられないもどかしさの渦中にあります。けれど、そうだからこそ、対話によって思考と言葉を紡ぎだすことを目指す哲学カフェの活動が求められているのだと感じさせられました。まだ活動は始まったばかりです。方法論も含めて、私たちにとってもそこで求める哲学＝てつがく（?）とは何か、まだまだ定かではありません。市井の方々の経験や言葉との対話から、その〈かたち〉を見つけていきたいと思っています。

賛助会員募集中！

カフェフィロでは、活動に賛同し応援して下さる賛助会員を募集しています。会員の方には、『哲学喫茶』最新号と『哲学喫茶瓦版』を送付させていただきます。

年会費 1 □ 3,000 円

振込先

銀行名：三菱東京ＵＦＪ銀行 東神戸支店
支店番号：492
口座番号：0104410

口座名義：カフェフィロ クワバラ ヒデユキ

※住所氏名をお書き添えのうえ、お申し込み下さい。

※振込手数料が発生する場合は、ご加入者負担となります。

お問い合わせ先

info@cafephilo.ne.jp（カフェフィロ事務局）

CAFÉ PHILO（カフェフィロ）

2005 年、大阪大学・臨床哲学研究室のメンバーを中心に発足。哲学カフェ、哲学対話セミナー（こども／大人対象）など、哲学の対話を促進する活動を展開中。「社会のなかで生きる哲学」のあり方を探り、それを実現するとともに、哲学とともに生きる人たちをサポートする組織です。

〒537-0023

大阪市東成区玉津 3 丁目 8－6 ロイヤル丸文 II 406 号室 たまてばこ内
e-mail: info@cafephilo.jp

<http://www.cafephilo.jp>

哲学喫茶瓦版 2011 年 9 月号

2011 年 9 月 30 日発行

発行人：高橋綾

編集・デザイン：松川絵里

福島駅で降りると、いきなり警備員に足止めされました。見ると、防災服を着た菅直人一行が通り過ぎて行きました。会場は、福島駅からそう遠くないショッピング・ストリートに面したビル「パセナカミッセ」に入ってる地域交流スペースです。少し早くついたので、周辺の様子を見ながら歩いていると、仙台で哲学カフェをしている西村さんにばったり。また、以前に取材を受けたことがある朝日新聞の文化部の記者が取材に来ていました。以前のネタは、震災で吹っ飛び、震災と哲学という新たなテーマで取材し直しているとのことでした。

地域交流スペースの隅にはキッチンがあり、そこでコーヒーやお茶を準備していました。主催者の小野原雅夫さんのあいさつで始まります。

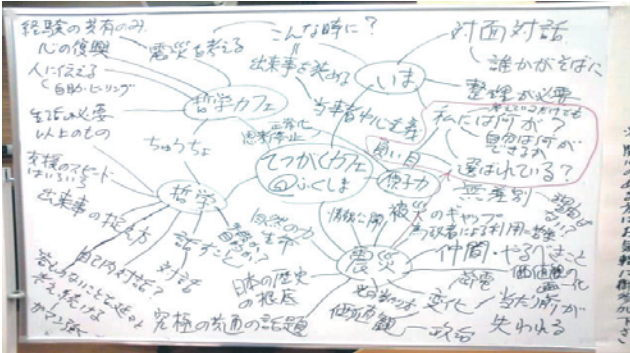


「なぜ、〈てつがくカフェ@ふくしま〉なのか？」と題した設立趣意書のプリントが用意されていました。哲学カフェの一般的な紹介の他に福島人の気質・語り口に言及されているのが印象的。

進行役は渡部純さん。参加者は12、3人。学生から定年退職後の人まで、さまざまです。仕事を抜けてきたという格好のコックさんもいます。

何を求めてこのカフェに来たかを語っているうちに、おのずと一人一人が震災をどのように経験したかを語り合っていました。震災後もややした思いを抱えて

暮らしている人びとが多いことがわかります。国家の基本体制＝憲法を語る人が一人あった他は、もっぱら身近な経験が語られました。当たり前前のことが当たり前でなくなったこと、炊き出しをして自分の目線が変わったこと、仕事に行けなくなってぐちゃぐちゃした思いのまま暮らしていること、ローカル・ラジオの効用、地震をどのように経験したか分かち合いたいという欲求、なぜあの人たちが死にわたしが生き残ったのか…そこから、今ここで哲学することの意味。行動せず哲学することへの戸惑い、生活の必需を満たすだけでは救われない思い、哲学には哲学の「支援のスピード」がある、「何かしなければ」と駆り立てられていることも傷つきの一つ、〈出来事〉が縮減されることへの疑問、原発の話が出ないのはなぜ…。



小野原さんがマインド・マップ風の板書をしてくれました。

後半に入って「ぶつかり合いがなければ対話ではないのでは？」と、問いを決めることが参加者から提案され、いくつかの問いがあげられましたが、問いを絞るには至りませんでした。しかし、次につながる問いがいくつも見えました。震災の経験を共有し、じっくり考えてみたいという思いが充溢したカフェだったと思います。

(報告：寺田俊郎／カフェフィロ正会員)

「原発について何を知るべきか？」



福島第一原子力発電所の事故が発生して約4カ月。「原発について何を知るべきなのか、福島県南相馬市出身の進行役と一緒に考えてみませんか?」。この呼びかけに、60名の参加者が集まりました。

進行の辻明典さん(大阪大学大学院生)と、高橋綾さん(カフェフィロ代表)が、「原発について様々な情報が飛び交っているけれど、どれが本当に信頼するのに値するのかを参加者のみなさんと考えたい」、「原発の是非に関する意見はとりあえず保留し、多様な観点から意見を出してほしい」と発言を促すと、「『基準値以下なので安全』というのではなく、実際の値がどうか、自分が考えるための情報を示してほしい」、「『信頼に足る専門家を探すべき』、「専門家

や報道はあまり信頼していない。福島出身の辻さんの個人の实感を聞いてみたい」、「原発は、スイッチを切れば止まるものだと思っていたが、そうではないということを今回の事故で初めて知った。知るべきかというより、知らされたことのほうが多い」・・・論点を絞ることが困難なほど多種多様な意見が次々とでてきます。

テーマの「何を知るべきか?」からやや離れて、「放射能で発癌するリスクと飛行機が墜落するリスクは?」といった「リスク」に関する問題や、「経済活動発展のためにはエネルギーの供給・確保は必要では?」といったエネルギーや経済活動に関する問題について議論が展開する場面も。なかなか信頼の基準や根拠を明らかにするには至りませんでした。参加者からは、

原子力に関する知識をなんとかして取捨選択し、自分自身の観点から意見を表明しようという姿勢が伝わってきました。

参加者からは、「専門家ではない、自分と同じ普通の人がこの問題をどう考えて、どんなことを疑問に思っているのか聞ける場所はなかなかないので、こういう場所があってよかった」、「どうしても、YESかNOを言いたくなってしまいうし、自分と異なる意見をきくのが辛くなってしまいうこともある。とても難しいテーマだった」といった感想が寄せられました。

中之島哲学コレッジ
新しい哲学の発信・交流を目指し、京阪電車なにわ橋駅構内のコミュニティスペース「アートエリアB1」で、毎月、哲学カフェ、セミナー、書評カフェなどを開催。

2011年5～7月 カフェフィロ活動一覧

- 5/10 哲学カフェ「震災で学んだこと」神戸市北区子育て支援センター 松川絵里
- 5/11 哲学カフェ「震災について、今私たちが考えたいこと」アートエリアB1 高橋綾
- 5/15 哲学カフェ「生涯学習?」コーヒーショップJUN 榎本直樹
- 5/21 哲学カフェ「不謹慎とはなにか?」とよなか国際交流センター 金和永
- 5/27 哲学セミナー「自閉症スペクトラム障害とのつきあい方?」アートエリアB1 竹内慶至、小菅雅行
- 5/28 哲学カフェ「震災について、今私たちが考えたいこと」Café Klein Blue 高橋綾
- 6/5 書評カフェ『人生の色気』カフェP/S 三浦隆宏
- 6/8 哲学カフェ「結婚したほうがいい?」アートエリアB1 井尻貴子
- 6/13 哲学カフェ「おひとりさまの自由と不自由」さする庵 桑原英之
- 6/18 新・哲学セミナー「ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』を読もう(1)」アートエリアB1 菊地建至
- 6/18 哲学カフェ「苦しみ」カフェサンナミジ 本間直樹
- 6/25 哲学カフェ「国旗・国歌は学校教育にとってどのような意味があるのか?」Café Klein Blue 寺田俊郎
- 6/24 セミナー「性・HIV 高校生からの投げかけ」アートエリアB1 るるくめいと、大北全俊、松川絵里
- 7/6 新・哲学セミナー「ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』を読もう(2)」アートエリアB1 菊地建至
- 7/12 哲学カフェ「国歌は必要か?」神戸市北区子育て支援センター 松川絵里
- 7/13 書評カフェ『がん 生と死の謎に望む』アートエリアB1 藤本啓子
- 7/16 哲学カフェ「あいさつってなに?」とよなか国際交流センター 楠本瑠子
- 7/17 哲学カフェ「なぜ動かなければならないのか?」コーヒーショップJUN 森本誠一
- 7/19 <テッドク!>キルケゴール『死に至る病』さする庵 服部佐和子
- 7/10 シネマ哲学カフェ『ちいさな哲学者たち』カフェバー サニーサイド 土屋陽介
- 7/23 シネマ哲学カフェ『ちいさな哲学者たち』オリンピック 高橋綾
- 7/27 哲学カフェ「原発について何を知るべきか」アートエリアB1 辻明典、高橋綾
- 7/30 哲学カフェ「勇気はどこから生まれるのか」千里公民館 高橋綾
- 7/30 哲学カフェ「東日本大震災と〈私たち〉」Café Klein Blue 寺田俊郎



てつがくカフェ@ふくしま開催まで

●周辺の被害状況は?

開催予定地だったビルが破損被害を受けたり、ライフラインの復旧に手間取り、特に断水が長期化して飲料水の確保が困難になりました。さらに、福島第一原発事故によって、深刻な放射能汚染の被害に見舞われました。

●再開のきっかけや後押しとなったのは?

早く福島の街に明るさを取り戻したいと、被災直後の早い時期から活動を再開された方々がいらっしゃいました。彼らの「こんな状況だからやりましょう」という言葉が、再開の後押しになりました。

●再開を困難にさせた要因は?

やはり、「この状況で哲学カフェなどやっている場合だろうか?」という一抹の懸念もありました。開催時期や当初予定していたテーマの再検討も含めて、周囲への配慮や状況に適った慎重な判断が必要でした。